

A full-page photograph of Oscar Pistorius at the start of a race. He is in the foreground, wearing a yellow and green South African singlet with 'SOUTH AFRICA' and 'TDK PISTORIUS Daegu 2011' printed on it. He is wearing his signature black and white prosthetic blades. He is smiling and looking towards the camera. In the background, other athletes are visible on the blue track, and a large crowd fills the stadium stands. A banner in the background reads 'Sprint together for tomorrow' and 'Daegu 2011'.

# オスカーが 笑った日

～義足ランナー ピストリウスの軌跡～

400m予選スタート直前に笑顔を見せた瞬間。彼が見据えるのはゴールだけではない

世界選手権テグ大会で、1人の青年に注目が集まった。優しい笑顔、たくましい上半身。ただ1点、居並ぶ世界的アスリートたちと違ったのは“足がない”ことだった。彼はなぜ、あの日あの場に立ち、笑顔を見せたのだろうか――。

文 ■ 星野恭子 写真 ■ 越智貴雄



## 南アフリカから、世界の舞台へ

世界選手権テグ大会の2日目。オスカー・ピストリウスが出場する男子400m予選のスタートまではまだ間があったが、所定の席に着く。いくつかの競技はすでに始まっていて、視線をあちこちに動かしながら眺めていると、スタンドを動き回るカラフルな3人組に目が留まる。手には「We ♥ Oscar」のパネル。もしや、と思っ

て声を掛けると、やはり、ピストリウスの応援団だった。

聞けば、英語学校の講師として今春からテグに滞在中の南アフリカ人で、7月にピストリウスが代表に決まったニュースを耳にしてから、今日ここで応援することを楽しみにしていたという。

「彼はヒーロー。南アフリカにとって、彼がこの大会を走ることはとてもスペシャルなこと。彼の努力をたくさんの人に見てほしい」

ピストリウスは1986年、南アフリカに生まれた。先天的に両脛（すね）の骨がなく、生後11カ月で膝から下の切断手術を受け、義足生活となる。「障害があるんじゃない。ただ足がないだけ」と、幼いころからスポーツに親しみ、持ち前の運動能力で州代表レベルのテニスや水球をはじめ、さまざまな競技で活躍する。

陸上競技には2004年、ラグビーで負傷した右膝のリハビリをきっかけに転向。本格的に練習を始めてから2カ月で地元の大大会に出場し、100mで11秒51を記録。当時の障害者世界記録12秒20を大幅に更新し、その夏のアテネパラリンピックの代表に選出される。100mで銅メダル、200mでは障害者新記録（当時）の21秒97で金メダルを獲得。以来、400mも含めたスプリ

ント3種目で、障害者記録を次々と更新する。

2007年、健常者の国際大会に初出場すると、400mで2位に入り、一躍世界の注目を集める。

「オリンピックに出て世界のトップランナーたちと競いたい」。ピストリウスの夢が膨らんだのは自然の流れだった。

## 義足にまつわる議論

だが、皮肉なことに、このレース終盤で数人を抜き去った鮮やかなラストスパートに、「義足は反発力が高く、健常者より有利ではないか？」という議論が飛び出す。障害者選手の多くは弾力性や耐久性に富むカーボン繊維を素材にした「スポーツ義足」を使う。その形状から「板バネ」とも呼ばれている。

事態を重く見た国際陸連（IAAF）が専門家に調査を依頼、その結果、「義足はルール違反」として主催大会への参加を禁止した。一度はあきらめかけたが、障害者スポーツの可能性を閉ざしたくなかったピストリウスは、悩んだ末にスポーツ仲裁裁判所に提訴。「義足の有



ピストリウスは南アフリカ代表として戦い抜いた。人柄もよく、世界中にファンがいる

世界陸上テグでは400mで準決勝進出。義足の優位性が議論に持ち上がったことも、功績の1つといえる



利性を示す十分な証拠はない」という裁定が下され、大会参加が認められた。だが、北京五輪の標準記録は突破できず、北京パラリンピックに出場。圧倒的な強さで、スプリント3冠に輝いた。

オリンピックへの思いはさらに募り、鍛錬は続く。アメリカでの武者修行などで心身を強化し、故障やアクシデントも乗り越えた今年7月、イタリアの大会で快走。400mでマークした45秒07は自己ベストとともにテグ大会の標準記録をも突破。ついに、メジャー大会への出場権をつかみ取ったのだ。

一方で、義足の有利性の議論が再燃したが、愛用するスポーツ義足のメーカー、オズール社（アイスランド）によれば、フィット感などの調整は繰り返してきたが、素材や反発性などの仕様についてはほとんど変えていないという。同社製の義足は性能や品質に定評があり、パラリンピアンの間でも人気が高い。

テグの予選レース後、義足について何人かの選手にも尋ねた。日本代表の金丸祐三は、「義足の選手とか関係なく、僕は彼を45秒07で走る選手として見ている」と語り、前回覇者の米国ラシヨン・メリットは、「オスカーのことは前から知っているし、一緒に走ったこともある。いいやつだし、強いハートをもった優れたアスリートだ。会うたびに速くなっている。きっとハードな練習をしているからだろう。義足がアンフェアか？ どんな議論になっているのか僕には分からない」と、特別視する選手は少ないように感じた。

## テグから、ロンドンへ

ようやくたどりついたテグの舞台での400m予選スタート前。これまで彼を追っていたカメラマンは、いつもと違う様子を目にした。「笑っている…」スタート直前に笑顔を見せたのは、これが初めてだった。

400mではセカンドベストの45秒39で予選を突破。

予選後、インタビューエリアで、取材陣に囲まれたピストリウス。準決勝が控えていたにも関わらず、彼は1時間以上も質疑に真摯に答え続けた。

その影響があっただけで、準決勝は46秒19に終わり敗退。しかし、4×400mリレー予選では第1走者として母国新記録に貢献、決勝での銀メダル獲得に弾みをつけた。この激走から1カ月、テグ大会を振り返ってもらった。「実は『オープンで走って45秒台』がテグでの目標だったので予選で達成できてうれしい。準決勝のタイムにはがっかりしたけど、いい勉強になった。次のレースで生かしたい。それに、リレーメンバーとして南アフリカ新記録を出せたことは誇り。テグでのレースはどれも一生忘れられない思い出になった」

今後の目標は「来年のロンドンオリンピックに行くこと」と揺るぎない。

「テグのスタジアムに響いた歓声の大きさに興奮した。こんな舞台にまた立ちたい。もっと努力してタイムを伸ばそうと強く思った」と話すピストリウス。彼をまた、見たいと思った。



**OSCAR PISTORIUS**  
オスカー・ピストリウス

1986年11月22日南アフリカ・ヨハネスブルグ近郊のサントン生まれ。先天的に腓骨がなく、生後11カ月の時、両脚の膝から下を切断。両足義足ランナーとして活躍し、同陸上クラブの100m・200m・400mの世界記録を持つ。アメリカを拠点にしながら、一般の国際大会にも参加。今年の世界選手権では400mと4×400mRに出場した。